

## 島から島へ：マルタ人が見た四国の可能性

徳島県万博推進課 地域おこし協力隊 ペイス・シヨナサン



## 異国の地での定番の質問

日本で新しく人に会うたびに、決まってこう聞かれる。

「どこから来たの？」

「マルタです。」

すると、一瞬の沈黙が訪れる。多くの人は「マルタ？どこ？」という反応をし、中には「地中海の楽園だよね！」と目を輝かせる人もいる。次に必ず聞かれるのがこの質問だ。

「どうして日本に来たの？」

## ゲームが導いた日本への道

マルタは四国と同じく小さな島で、かつては世界の果てのような感じだった。私の幼少期、マルタと世界をつなぐ主な窓口はイギリスからの観光客であり、南のリビア、北のイタリアが最も身近な国だった。

私はイタリアを経由して運ばれてきた日本の文化に興味をもった。日本のアニメやゲームは初めて私に日本という国を垣間見せてくれた。アニメへの興味は次第に薄れたが、ゲームへの情熱は増していった。遊ぶだけではなくゲームの仕組み、世界観、アイデアの根幹を理解したいという欲求が生まれ、それが人生を大きく動かすきっかけとなった。

最初の転機は、マルタで日本人の先生に日本語を学び始めたことだった。小さな一歩だったが、やがて私はバックパッカーとして日本を旅することに。この経験がさらなる決意を固め、ゲーム開発を学ぶためにイギリスへ渡った。日本はもはや遠い夢ではなく、避けられない運命のように感じた。

2018年、私はついに日本へと移住した。

## 愛媛での新しい生活

私はJETプログラムを通じてマルタ政府から選ばれた初のALTとなった。日本ではマルタの公用語は英語であるとあまり知られておらず、マルタ政府がALTの試験導入を進める際、受け入れてくれる自治体を見つけるのが非常に難しかった。

最初に受け入れを表明した町に私の配属は決まった。それが愛媛県の上島町。広島県に隣接し、しまなみ海道に近い、島々が集まる町だ。

最初の1年は決して楽ではなかった。私は魚島にある学校に配属されたが、当初は日本語がほとんど話せなかった。日常生活は身振り手振り、地元の人への優しさに支えられた。平日は英語を教え、週末には島を探索したり、愛媛県内を巡って過ごした。

1年後、別の島の学校に異動して4年間教職

を続けた。しかし魚島とのつながりは切れず、週に一度は島に戻って授業を続けた。日本語が上達するにつれて、地方が抱える現実が見えてきた。過疎化、公共交通機関の不足、そして高齢化など。町を支える若者は都市へ流出し、残された高齢者は地域が消えないようにと必死で支え合っていた。

## 徳島での新たな挑戦

この時期に私は地域おこし協力隊という存在を知った。地域に根ざし、活性化に取り組む人々。彼らの活動に共感する中で、新たなチャンスが舞い込んできた。それが、徳島県庁での万博関連の地域活性化プロジェクトだった。ゲームとテクノロジーの経験を活かし、世界へ向けた情報発信ができるチャンス。私は教師としての契約



マルタのアンドレ・スピテリ大使を徳島県知事に紹介

が終わるのを機にこの仕事を受け、徳島県へ移住した。

徳島県での仕事を始めてから、最初はCIR（国際交流員）のような翻訳業務を期待されていた。しかし、自分の力をもっと活かし、実践的な仕事に飛び込みたかった。

私の仕事は大きく分けてアウトリーチとデザインの二つだ。アウトリーチは、万博の目的や必要性を徳島の人々にしっかりと伝えることだ。万博の徳島県ブースは徳島の過去、現在、そして私がよく言う「今日の次の日」を象徴するものだ。徳島で暮らす様々な人々と関わりながらプロジェクトに地域の声を反映させ、徳島の未来や可能性について一緒に考える。デザインではロゴ、ポスター、イラストなどのグラフィックデザイン、ブースやイベントの3Dビジュアライゼーションを手がけている。



神山まるごと高専での万博ワークショップ



高齢者向けの万博アウトリーチワークショップ

る。時代を超えて、どの国の人にも響き愛されるものを目指す。「次のチャンスは徳島にあるかもしれない」と感じてもらえるよう、楽しく、深みのある体験ができるものを作りたい。

仕事を通

じて、徳島の文化への関心も深まった。例えば、徳島の鼓動とも言える阿波おどり。私はまだうまく踊れないが、実際に踊ってみることで踊りの魅力や支える人の情熱を知った。この経験

を活かし、ブースのプロジェクトマップに阿波おどりの要素を組み込むことで、そのエネルギーを映像で伝えることに挑戦している。また、美術系の学校を出た私は藍染に強く惹かれた。今はどこへ行くにも藍染の何かを身につけている。



所属する「天水連」との記念写真



万博での阿波おどりイベントをCGで再現したビジュアル



城西高校の生徒が藍染めの行程を説明



城西高校での藍染め体験

万博を超えた未来へ

万博が迫る今、私はふと考える。この先、どうする？

今まで万博の準備に全力を注いできた。都市の魅力に惹かれる気持ちもあるが、私はまだここでやるべきことがある。マルタは地理的に孤立し、苦悩しながら経済を確立した。マルタ人として、四国はもつと良い未来を作ることができると信じている。「四国はまるで国立公園のようだ。美しいが、空っぽになりつつある。」と、語る人もいる。私は四国を「人が集まり、育つ庭園」にしたい。伝統と革新が交わり、次世代が存分に成長できる場所だ。地域活性化とは、単なる復活ではない。新しい地域の設計図を描き、本来の地域らしさを未来へとつなぐことだ。



万博の徳島ブースをCGで再現したビジュアル